

□海外文献紹介□

Crohn 病の直腸周囲膿瘍一ドレナージと経過

Perirectal abscess in Crohn's disease Drainage and Outcome: Pritchard TJ, et al (Dis Colon Rectum 33: 933-937, 1990)

直腸肛門病変を有する Crohn 病患者に対する手術療法の役割には議論の余地がある。今回、著者らは Crohn 病患者の直腸周囲膿瘍における切開ドレナージと留置ドレナージの効果と予後について検討した。

対象は 1980 年から 1988 年の間に経験した 566 例の直腸周囲膿瘍のうち、Crohn 病による 38 例(男 22 例, 女 16 例, 平均年齢 32 歳)で、このうち 32% は初発で、約 80% は単純膿瘍で、残りの 20% は複雑膿瘍であった。治療の内訳は約半数が切開ドレナージ、残りの半数が留置ドレナージを受けた。この留置ドレナージのうち、ループカテーテルドレ

ナージ法とマッシュルームカテーテルの膿瘍腔内留置法が半々であった。術後、16 人にメトロニダゾールが投与された。

膿瘍の治癒に要した期間は、1 か月以内は 8 名(21%)、2 年までが 11 名(30%)、2 年以上が 12 名(32%)であった。7 名が追跡不能であった。直腸切開を受けた患者の 83% で治癒までに 6 か月以上要した。カテーテルドレナージを受けた患者のうち、来院しなかった 5 名以外の 13 名全員で 6 か月以内にカテーテルが抜去可能であり、3 名では 1 か月以内であった。膿瘍治癒後、切開ドレナージを受けた患者の 56% で、膿瘍の再発がみられたのに対し、カテーテルドレナージの患者では 45% に再発が起り、やや少なかった。肛門周囲膿瘍からの敗血症をコントロールするために直腸切開が必要となったのは切開ドレナージ患者(44%)で、統計的に有意ではなかつ

たが、カテーテルドレナージ患者(31%)より多かった。術後メトロニダゾールの投与された患者の 16 名のうち、わずか 3 名(19%)が直腸切開術を受けたのに対して、投与されなかった 22 名のうち、9 名(19%)が直腸切開術を受け、メトロニダゾール投与群で直腸切開術の回避される傾向が示唆された。

著者らは、今回の検討から次のように結論している。直腸周囲膿瘍を有する Crohn 病患者の予後は病気自体の重症度や経過年数のみならず内科的、外科的治療のタイミングなど多くの要因によって影響されるが、長期のカテーテルドレナージと術後のメトロニダゾール投与は敗血症の発生頻度の減少と直腸周囲膿瘍の治療に有用である。

(愛知県がんセンター病院消化器内科

松浦 昭 抄)